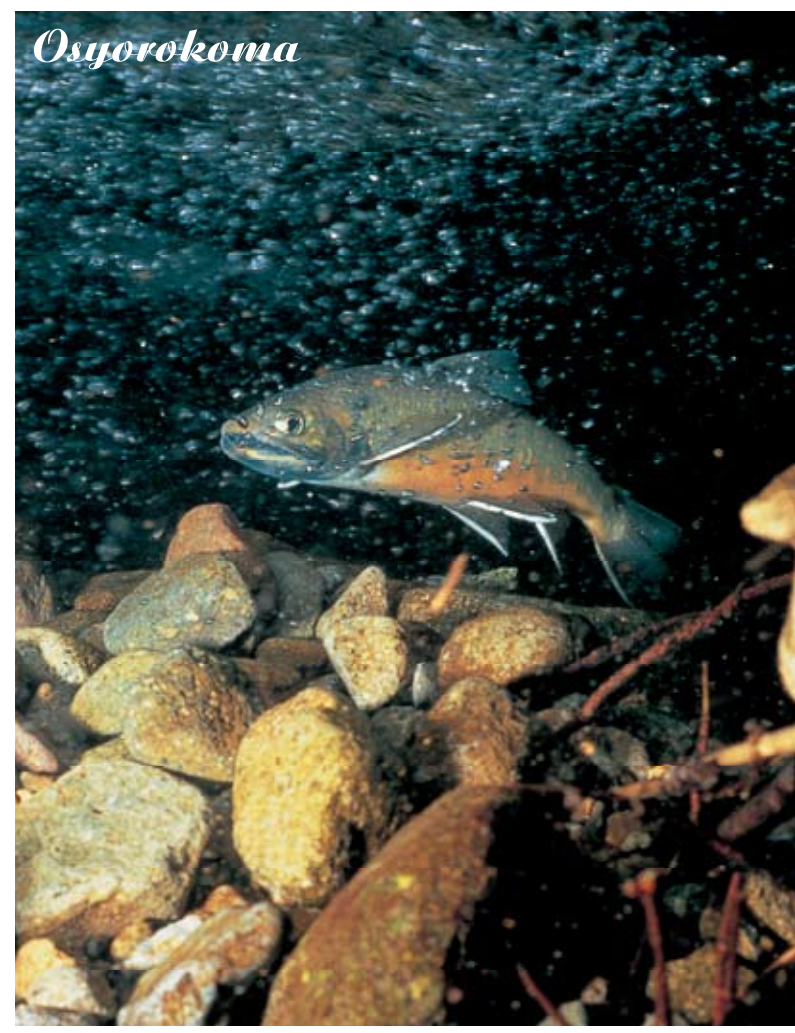


# 川と人

Vol.15  
1999

あす  
「特集」 未来に向かって、旅立とう!  
水環境フェア'99 in SAPPORO

Photo:水の見学会(札幌市・安春川)



*Oshorokoma*

## 上流の小沢にひっそりと棲む、美しき魚

オショロコマ——— **サケ目 サケ科**

体側に朱紅点を持つ美しいイワナ。口がアメマスに比べやや下方にあり、アメマスが混棲するところでは水面近くにアメマスが、底の方にオショロコマが棲み分けているという。小型で15~20cm、流れの中で静止して、流下してくる昆虫を捕食する。3~4年で成魚となり、10月から11月にかけて産卵する。山地の清澄な溪流や湖、支流やより上流の小さな沢に生息するが、その数は極めて少ない。札幌市豊平川さけ科学館では、たくさんの淡水魚と共に泳ぐ姿が見られます。  
札幌市豊平川さけ科学館 札幌市南区真駒内公園2-1 Tel (011) 582-7555

監修 北海道開発局・石狩川開発建設部・旭川開発建設部  
発行 (財)石狩川振興財団 A060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目5番地 Tel (011) 242-2242  
平成11年10月





あす  
す  
未来に向かつて、旅立ちろー！

Contents

特集 水環境フェア

2~6 '99 in SAPPORO  
水環境全国交流シンポジウム

World Report 竹内 正信  
7~9 熱帯の火山国 インドネシア

イベント・レポート  
10~12 石狩川に魚と蛍を帰そうかい

13~14 インタビュー 川に生きる  
上川町商工会婦人部 部長 渡部 ヒデ子

15~16 流域の現在  
滝川市「滝川ふれ愛の里」  
新篠津村「本年度緑化推進運動功労の表彰」

Rivers Topics  
17 ■北海道開発局・北海道  
石狩川魚がのぼりやすい川づくり推進  
モデル事業実施計画

18 ■北海道開発局 旭川開発建設部  
「流水保全水路」試験放流後の、調査結果公表

19 ■北海道  
毎年恒例、春別川の「クリーンいかだ下り」

20 ■札幌市  
新琴似西連合町内会が「水環境賞」を受賞

The Message from  
石狩川振興財団 活動報告  
21~22 ○市町村河川情報委員 情報交換会議  
○平成11年度 親水体験親子バスツアー  
編集後記

Photo: [右] 水環境全国交流シンポジウム  
[中央] 共催催事 '99北海道Eボート大会(炭戸川)  
[左] 共催催事 豊平川リバーフェスティバル'99

特集 豊かな水がある限り、未来はきっと輝いている  
水環境フェア'99 in SAPPORO

「環境の世紀」といわれる新しい時代。私達は「水」との関わり方について、  
未来に何を発信するのか、私達は何をすべきか？ この大命題にミレニアムの今、答えが求められています。  
それらを背景に、歴史的な重みを持ちながら北都・札幌で行われた水環境フェア。  
日本全国からたくさんの人々が集まって、大きな問いかけに真正面から向き合ったこの4日間に、  
その答えが見えてきました。



こぎ出そう、豊かな水が開く未来へ。

# 水環境フェア'99 in SAPPORO

《スケジュール概要》

8/5  
(木)

## 水の見学会

- 施設見学コース/サケ科学館、下水道科学館、川の博物館、藻岩山、精進川等



- 自然観察コース/ウトナイ湖サンクチュアリー、茂漁川、千歳川サケのふるさと館
- 試乗体験コース/ 茨戸川でのEポート試乗体験、調査船試乗、川の博物館

## 交歓会

8/6  
(金)

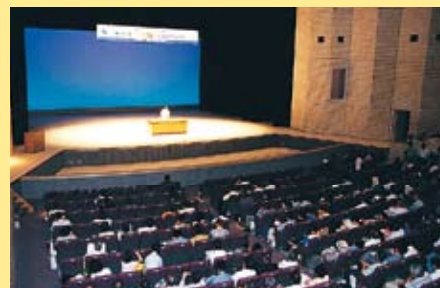
## 川の体験会

- 定山溪ダム、定山溪ダム資料館の見学

## 分科会

- 子供サミット感覚のディスカッション

## 水環境全国交流シンポジウム



### 第1部

- 基調講演/「らんぼう流 自然との親しみ方」
- 全国レポート/全国各地の水環境保全に取り組む活動報告
- トークショー/「川に学ぶ」

### 第2部

- 北海道の活動報告
- 「川に学ぶ」分科会発表
- 札幌子ども宣言

## パネル展

8/7  
(土)

共催:豊平川リバーフェスティバル'99

8/8  
(日)

共催:'99北海道Eポート大会/茨戸川

「本来我々の顔を映す、心を映す、川の水を清流に変えていく時代に、  
少しずつ入ってきたなというのが実感です」みなみらんぼう



「全国レポート」  
[右]多摩川センター 山道 省三氏  
[中央]九州水環境ネットワーク 岡 裕二氏  
[左]よこはまかわを考える会 森 清和氏



女声コーラスグループ「にれの会」によるオープニング。水にちなんだ曲が合唱された

「らんぼう流 自然との親しみ方」をテーマに基調講演する  
みなみらんぼう氏



流し、全国で川の運動をしている人達のネットワークを広げていく事が必要といった、実のある意見が交されました。

るトークショーでは、行政担当者や水環境保全に取り組む方、そしてみなみらんぼう氏も加わり、「川に学ぶ・川に遊ぶ」という社会をどうやって作っていくのか、そのために従来の行政主導から一歩進んで、住民と行政がパートナーシップを取りながら上流と下流が交

晴天の中、茨戸川で行われた共催催事、「'99北海道Eポート大会」



## Rivers Future

# 水環境全国交流シンポジウム

8月1日「水の日」から1週間を「水の週間」として、広く一般に水環境の保全と再生についての啓蒙を求める事を目的に、平成3年から行われてきた水環境フェア。第9回目を数える今年度は、北海道の屋根大雪山に源を発する石狩川の支流、豊平川の豊かな水に育まれて発展してきた北都・札幌で、6日、全国各地から水環境の保全と創造に尽力されている方々多数が集って、シンポジウムが行われました。

## 「川に学ぶ・川に遊ぶ」社会の構築へ シンポジウム 第1部

女声コーラスグループ「にれの会」による水にちなんだ曲の美しい合唱で水環境フェア'99、水環境全国交流シンポジウムは幕が開けました。シンポジウムは2部構成で、昨年恵庭市・茂漁川の改修完成を記念したシンポジウムにも講演し、自然環境の保護活動に積極的に関わり組む作曲家・みなみらんぼう氏の、「らんぼう流 自然との親しみ方」をテーマにした基調講演で第一部はスタートしました。全国の、世界の山々を登り、森と水の役割や川と密接につながった生活を営む国の人々、それに対して都市化の中で川に背を向けた暮らしをしている日本の現状などを、じつにわかりやすく、ユーモアを交えて語り、「アキツシマ(秋津島)といわれ水と親しく付き合ってきた日本人の、古代の豊かさをもう一度21世紀に伝えていこう」という熱い呼びかけで終了しました。

続いて行われた全国レポートでは、東京の多摩川、横浜、そして九州の水環境保全に取り組むグループを代表する三方が、川や水に取り組む現状と課題、学校ビオトープなど21世紀を担う子供達への教育、流域住民が多数参加した活動とそのためソフト整備の必要性などを報告しました。

「川に学ぶ」をテーマとした第一部最後のプログラムであ

全国各地の水環境活動等を紹介した「パネル展」



建設省河川局足立敏之氏、鶴見川流域ネットワーク大澤浩一氏、呉大学教授小谷寛二氏、そしてみなみらんぼう氏が加わって行われた「トークショー」







事前に行われた分科会の成果を子供達が発表

## 北海道の水辺から、全国へ。 シンポジウム 第2部

第2部はまずホスト地である北海道の水環境に関する活動の報告から始まり、NPO法人の水環境北海道が97年から続けている体験環境教育「千歳川・かわ塾」と、日本一きれいな札内川を擁し、住民運動が活発な十勝エコロジーパーク財団の15年間にわたる活動がそれぞれ報告されました。

その中で「環境の時代」を担う、子供達の報告に注目が集まりました。

北海道の活動報告



江別市立対雁小学校 堀井 雄平・耕平さん



札幌市立発寒中学校 科学部



北海道札幌拓北高等学校 理科研究部



参加者を代表して、山崎 雄太さんが札幌こども宣言し、次回開催地埼玉県大宮市に引き継がれた

## Rivers Future 水環境全国交流シンポジウム

### 「川に関する研究」

北海道札幌拓北高等学校 理科研究部

石狩川下流に位置する拓北川（トンネウス沼）に生息するトンボの種類構成と季節消長を7年にわたり調査した結果や、ヘイケボタルの飼育と地域住民や小学生と行っている放流などが報告され、本格的な研究内容もさることながら、「地域に支えられながら、ただひたすら自然と向き合い、そのメッセージを大きな声で叫んでいる」という言葉が胸を打ちました。

札幌市立発寒中学校 科学部

札幌市の西に流れる発寒川を題材に、自分達の川はどのくらい汚れてしまったかを知るために、毎月1回続けた水質調査の結果が報告されました。発寒川に含まれている物質の種類や量を知ること、結果として、発寒川はきれいな川に属すことがわかりましたが、上・中・下流に分けて全体の濃度を測定するなど、今の結果に満足することなく今後も継続していくという固い決意を披露しました。

江別市立対雁小学校 堀井雄平・耕平さん

浄水場の近くの河原や水が汚れていることにショックを受け、自分で24力所の水質検査を行いました。その結果がよくわからなかった事から、先生や開発局の人に「数字だけでなく、川の様子を見て」との助言を得て、今年の5、6月に再度調べたら、前回見えなかった川幅、水深、流れの速さ、河原などが見えた事、これを機にキャンプや釣りなど川と触れあった体験を素直に語ってくれました。

### 「川に学ぶ」分科会発表とグラウンドファイナール

「よこはまの川と緑を考える子ども会議」、東京の「多摩川ふれあい教室」、宮城「ひたかみ水の里」、北海道「旭川市

立西神楽中学校」、そして熊本「緑川流域ネットワーク」の子供達が事前に行った分科会の成果を発表、川の探検や川遊び、ホタルの飼育など、それぞれの地域で行っている活動や他地域の川への興味等、熱いディスカッションの様子が伝わってくる内容でした。最後に参加者を代表して山崎雄太さんが力強く「札幌子ども宣言」し、2000年の水環境フェア開催地・埼玉県大宮市への引き継ぎで全てのプログラムは終了しました。

専門の研究室も顔負けの詳細な研究や素朴な疑問からの出発。きっかけや内容は違っても、今回の発表はどれも子供達の純粋な好奇心や探求心、川への思いがほとばしり、次代の希望の光のようでした。こういう子供達が増えてくれるよう、私達一人一人が漕ぎ出していく番です。

### 札幌子ども宣言

私達は危ない川、汚い川に行かなくなりました。でも私達は川が大好きです。危ないのなら、どうして川が危ないのか、どうしたら安心して遊べるのか、実際に川に行つて学ぶことが大切です。

川がどうして汚れているのかを調べたり、また、少しでも汚さないようにするなど、自分達の手でできることから始めたいと思います。

川で生き物と接して、生き物達から元気をもらいましょう。

川で遊んでいる人は、すごく元気がいいです。

河川局長さんのお話にも励まされました。みなさん川に行きましょう。

そして、いい川になる日まで力を合わせましょう。

多くの人で賑わった共催催事「豊平川リバーフェスティバル'99」



各分野のプロフェッショナルを講師に、今年の7/24~26の3日間行われた第3回リバースクール「千歳川・かわ塾」



北海道の活動報告 [右]リバースクール「千歳川・かわ塾」 荒関 岩雄氏 [左]十勝エコロジーパーク財団 太田 昇氏



「この水はシカもキタキツネも飲んでいけるのかな、この自然から生まれてきた水が石狩川になるなんてすごい」堀井雄平・耕平



「'99北海道Eポート大会」(彦根川)記念植栽



# 熱帯の火山国インドネシア

建設省河川局河川計画課課長補佐 竹内正信 インドネシア共和国  
公共事業省水資源総局砂防技術センター派遣

東ティモールの独立から、  
分裂の危機に揺れる新生インドネシア。  
最大援助国であり投資国でもある日本では、  
インドネシアの姿が見えないのが実状です

## 赤道直下、 世界最大の火山国

インドネシアは人口でいえば世界第4位、2億人以上の人間を養っている大国です。また、赤道直下の熱帯地域の島々に、東西に長く広がる国土は3つの時間帯を持ち、面積は日本の約5・5倍。そして世界に800余りあるといわれている火山のうち130弱、実に15%以上を擁する世界最大の火山国でもあります。ちなみに、日本の火山は約80。密度でいえばインドネシア以上ですね。

日本では1926年の十勝岳の火山泥流（144名死亡）や1991年の雲仙普賢岳の火砕流（43名死亡）が近年の火山災害として有名ですが、インドネシアではここ100年以内だけでも噴火や土石流で、クルー火山では1919年噴火で5110名死亡、1966年には210名、1990年34名、アグン火山では1963年1148名、スメル火山では1976年14名、1981年369名、メラピ火山では1982年27名、メラピ火山では1969年3名、1976



〈河床変動の激しい中流部〉  
中下流部では谷は浅くなり、  
河床は激しい土砂移動を物  
語っています。



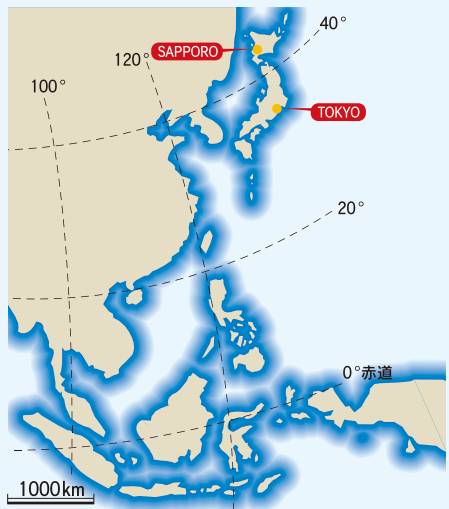
〈火砕流流下個所遠景〉私が勤務するジョクジャカルタから良く見える標高2970mのMerapi山です。活発な活動を続ける火山で、写真左側に見える焦げ茶色の部分が、昨年火砕流が流下したエリアです

年29名、1994年94名等々枚挙にいとまがない位悲惨な被害を繰り返し受けています。聞いたところによれば、インドネシアの火山は日本の火山より活発（壮年期）なのだそうで、そのせいか、日本では富士山以外には見られない2〜3000m級のコニーデ型（富士山型）の火山があちこちに見られます。

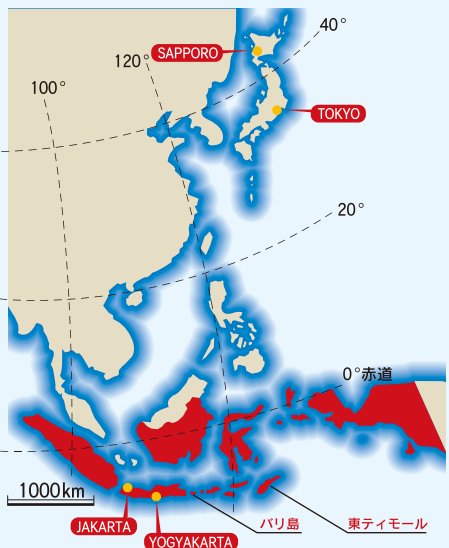
砂防技術センター（STC）はこの多発する火山災害に対抗するための人材育成と技術開発等を目的に、日本の援助によって設立された組織です。1982年の設立当初は火山砂防技術センター（VSTC）という名前の組織でした。現在、インドネシアでは、やはり日本からの援助などで（簡単にいうと低利の借金）各地の火山防災事業が進められています。

## Do you know INDONESIA?

インドネシアという国を知っていますか？ちょっと年輩の方ならパレンバン降下作戦とか聞いた覚えがあるかもしれません。さてさて、ではインドネシアはどこにあるのか、わかりますか？



私は現在インドネシア共和国ジョクジャカルタ特別州にある砂防技術センターで働いています。着任して約5カ月になりますが、実は私も赴任前はインドネシアがどこにあるのか、正確なところは知らなかったんですね。ベトナムは知っていました。シンガポールも知っていた。で、バングラデシュも知っていた。さてさて、インドネシアはどこでしょう？ 答えは地図を見て下さい。「最後の楽園」として超有名な観光地バリ島はインドネシア共和国の一部です。



WORLD REPORT





一人一人の石狩川への思いを乗せて、石狩川の上から下まで全長260kmを漕破した壮大な川下りリレー。それは小さな流れが集まって、大きな流れとなって海にたどり着く、川そのものに似た過程を経て、実現したのもありました。

上川町での出発式でヤマベ、ニジマスを放流



# 石狩川流域に住む住民として、私達は何ができるのだろうか？

Relay a Message



イベント・レポート  
「石狩川に魚と蜚を帰そうかい」

## WORLD REPORT



〈左上：河岸上の耕作地〉  
火山中腹の中上流部は河川は深い谷となっていることもあります。河床にはあまり表流水が見られず、谷の深さとあいまって耕作には苦勞しているようです。

〈右上：1998年火砕流流下末端〉  
Merapi山南西面の標高約1000m地点です。昨年発生した火砕流の堆積地の最下流端です。



〈左下：破壊されたスリットダム〉  
インドネシアでは多数のスリットダムが建設されていますが、これはSumeru山流域のもので、激しい土砂流下に耐えきれずスリット部が壊れてしまったものです。

### 数百の民族と数百の言語があり、土地に執着する国民

インドネシアの火山防災事業で難しいのは、人口圧が非常に高いことや、土地に対する執着が非常に強いことです。30年以上前のことですが、政府の方針により、メラピ山の危険地域の村の住民数千人を他の島に移住させたことがありますが、しかし結果として、しばらくして住民は封鎖された村に舞い戻ってきました。言葉も生活習慣も異なる土地になじめなかったこと（インドネシアには数百の民族と同じく数百の言語があるといわれている極めて多様性に富んだ国なので、日本では秋田県の人や鹿児島県の人になじめない、といったレベルとは根本的な違いがあるのだと想像できます）や、先祖の霊と切り離されたことによる喪失感が主な原因であったと聞きました。

また、ボルネオ島やスマトラ島に広く分布する熱帯性泥炭等と異なり、比較的簡易に水田等の耕作が可能な火山地域は、膨大な数の国民を養っていくためにはかけがえのない耕作地でもあるので、この点からも簡単に火山地域を立入禁止にしたりはできません。

一方、日本よりも進んでいることもあります。10年以上前から129の火山でハザードマップ（土石流、泥流や火砕流の流下の恐れのある区域、噴火に伴う火山碎屑物の降下範囲、避難経路や避難場所を明示した地図）が公表されているのです。しかし、残念ながら地図を見てもその意味を理解できない人が多く、その

効果は限られているともいわれています。

「地図が理解できない？」といっても馬鹿にしてはいけません。「年超過確率1/100」、つまりある年に発生する確率が1%の現象を「100年に一度」と表現し、「その他の99年はどうするんじや！」などという議論をしている日本と、本質的に何の違いもないと思いませんか？

国家予算が限られ、防災対策が遅々として進まない中で大きな被害を防ぐためには警戒避難態勢の整備しかないということではインドネシア政府も重々承知しており、現在でも雨期には24時間体制でSITC職員がメラピ山の雨量、流量及び土石流監視を行っています。地域の警戒避難態勢もそれなりに確立されており、鉱業エネルギー省の火山監視局及び砂防技術センターの情報を受けて、SATLAKと呼ばれる地域自主警戒避難組織が避難勧告を行い、実際にそれで大きな被害を防いだこともあります。この辺りが自然災害の恐ろしさをすでに忘れた人間が多く、何かあれば、警告しなかつた誰かの責任にすることの多い日本との大きな違いなんだなあと感じています。

私自身も当地に赴任してから、暴動、暴行や盗難、事故、病気、災害は銀行倒産などから自分及び家族の身を守るのは自分自身の責任である、と強く実感するようになりました。仕事や遊びだけでなく、無事に平穩に生きていくためにも、また、よく考えて色々努力することが必要なのは、きつとインドネシア等の発展途上国だけではないはずです。



イベント・レポート  
「石狩川に魚と蛭を帰そうかい」



7日間に渡り石狩川を下ったボートが無事ゴール



川下りリレーは源流から河口までを、2隻のボートに分かれてキャンプをしながら漕ぎ、途中セキなどが伴走するなど安全性に充分考慮しながら行われました。各町の停泊地点でプラスチック製のポストに投函してもらったのは、今回の試みを後の時代まで語り継ぐため、子供達の率直な思いを記したメッセージです。メッセージは関係市町村の小・中学校の児童、計218名が書いたもので、今後このメッセージは一冊の本として約1,000部程度作成、10月末頃に市町村に配布されます。では画期的な試みとして、各停泊地点毎に川の水を採取、到着後に会場で展示し、その後水質汚染の検査等に使用する予定です。

メッセージを積み込んだボートは、太鼓や吹奏楽奏などその町独自の温かい歓迎を受けながら、ついに最終地点の石狩川河口橋に到着しました。「今度は下から上に上ろう」という声が出るなど、到着せしモノは大変な盛り上がりで、全日程を無事終了しました。

21世紀を担う  
世代の思いを  
未来につなげる

大雪山系黒岳の山開きである6月27日に、石狩川の源流の上川町を出発。途中、流域市町村全てに立ち寄り、各町の石狩川へのメッセージを受け取って、7月3日の海開きの日に石狩市の河口に到着するという、壮大な川下りリレーが行われました。この試みは上川町有志達の「石狩川の水質は源流に住む者として守っていく責任がある」という思いから始まったものです。

石狩川の全長268kmのうち、最上流部の危険箇所を除いた約260km。参加市町村、上川、空知、石狩管内の約23市町村、メッセージを寄せた人数218名。費やした日数7日。この大規模な川下りが現実のものとなった発端は、出発地点の上川町の住民の皆さんからの問題提起でした。石狩川の源流に生活する住民として、石狩川の水質や自然環境を守る責任があるのではという思い。その考えを広げる活動の中で、石狩川の源流から河口まで、石狩川に寄せる思いをメッセージにして、リレー方式でつなげ、世論

石狩川源流住民の  
思いが流域を  
一つにした

「石狩川に魚と蛭を帰そうかい」

の喚起と啓蒙を図ったかどうかというアイデアが出されました。この趣旨に関係機関も賛同、上川町の商工会を中心に、その流れはまち全体に広がり、ついに今年1月「石狩川の清流を守る会」(会長・浜中昌朋上川町商工会長)を設立、川下りリレーも「石狩川に魚と蛭を帰そうかい」と銘打って、事業全体を参加市町村の商工会を含む実行委形式で行うことなどが決められ、この壮大な夢は現実のものとして力強く動き出したのです。



2隻のボートが力強く川を下る

私達はこういった試みがないと、身近な川がずっと遠い町とつながっていることを感じない生活をしています。これらの21世紀に、川と共に私達の意識も浄化する活動を、これをきっかけとして広げていかなければなりません。そういった意味でも上・中・下流が一体となった今回の試みは大きな布石となり、子供達のメッセージも今後の石狩川を考えると、うえで貴重な財産になることでしよう。



上流から下流まで採取された川の水  
(向かって右から上流)

「石狩川に魚と蛭を帰そうかい」全行程

上川町	6/27	菊水橋左岸
愛別町	6/28	愛別オートキャンプ場
比布町		あざふ橋下流左岸
当麻町		あざふ橋下流左岸
東郷町		永山橋下流右岸
旭川市	6/29	旭橋下流左岸
深川市		深川橋上流右岸
妹背牛町		妹背牛商工会前
雨竜町	6/30	江竜橋上流の雨竜川右岸
新十津川町		石狩川橋下流右岸
滝川市		スカイパーク護岸下流
砂川市		砂川大橋左岸
奈井江町		奈井江大橋上流右岸
浦臼町		奈井江大橋上流右岸
美幌市		中村揚水機場
月形町	7/1	月形大橋上流右岸ボンブ
北見市		月形大橋上流右岸ボンブ
岩見沢市		岩見沢大橋上流右岸
新篠津村		岩見沢大橋上流右岸
江別市	7/2	新石狩大橋上流左岸
当別町		札幌大橋上流右岸
札幌市	7/3	あいの里東小学校前
石狩市		石狩河口橋上流左岸



東雲小学校の生徒などが加わった  
パネルディスカッション（30周年  
記念事業のシンポジウム）

# INTERVIEW



上川町商工会婦人部 部長  
**渡部 ヒデ子さん**

石狩川の源流から河口までを各町のメッセージとともに下った  
「石狩川に魚と虫を帰そうかい」は、源流の町・上川町のとあるイベントが発端となりました。  
それは自然環境に配慮した暮らし方や、  
源流の住民としての意識の啓蒙等を推めている頼もしい女性達の小さな力の結集でした。



HIDEKO WATANABE

んですよ。皆同じ意識を持っているので、  
活発な意見が飛び交いチームワークがと  
てもいいんです。やっぱり家族も含めて  
皆で協力しないとできないですから。私  
達は主婦ですから、一番の生活者ですよ  
ね。今までは水に限りがあるなんて考え  
ない生活でした。川や水のことを皆で  
勉強しましたよ。河川事務所に行ってお  
話を聞いたり、調べたり。だからもう研  
ぎ汁は流せないし、いろんな事を考えな  
がらるようにしました。自分がこれ  
ほど変わったんだか  
ら、婦人部の皆も変  
わっているはずですよ。  
婦人部結成20周年  
の記念事業では「花  
いっぱい運動」とい  
って、商店街に花を  
植えました。まだガ  
ーデニングがこれほ  
どブームになってい  
ない時です。それか  
らこれは私のアイデ  
アなんです。牛乳  
パックを小さく何本  
にも切って、それで  
鍋についた残り物を  
すくうんです。そう  
すれば流さなくて済  
むでしょう。花もそ  
うですが、牛乳パッ  
クも婦人部は皆やっ  
てます。「私だけ  
ならいいじゃない  
か」から「私だけ  
でもやってみよ  
う」という気持ち  
が一番大切ではない  
でしょうか。

## 上流で流せば下流が汚れる。 源流の住民としての責任

「30周年のイベントの時に話題にな  
りつくづく感じたのが、一番川を汚して  
いるのは私達の生活なんです。川が汚  
染された原因の70%が生活排水です。そ  
れを知ったときは正直ショックでした。  
合成洗剤や食べ残しの残り汁、お米の研  
ぎ汁……。全てを今すぐ変えるわけには  
いかないけれど、できることはやってい  
く、毎日の生活の中で少しでも気をつけ  
ていかなければ……」  
私達の地元では源流のまちという事を  
意識している人が少ないですね。でも  
川のことや水のことを知ると、下流のこ  
とも考えた生活をしなければいけない。  
私達はいつもおいしいお水を飲んでいる  
けれど、石狩川のずっとずっと後の下流  
の町の人でも飲んでいるんです。上流で汚

石狩川の源流、上川町にある商工会婦  
人部。結成30周年を迎えた記念事業「大  
雪の美しい自然環境と母なる石狩川の清  
流を守るために。私たちは何をしよう  
か」をテーマとしたシンポジウムは、  
昨年  
10月7日に行われ、石狩川の源流に住む  
住民として、その水質と自然環境を守る  
責任があるのではないかと意識を原点  
としたもので、小学生を含む参加者25  
0名による実のある意見交換は望外な評  
価を受け、後の大きなイベントにつな  
がった訳です。商工会婦人部は以前から環  
境に配慮した暮らし方の実践や勉強会、  
ディスカッションを自主的に続けていま  
した。私達の毎日の暮らしが川を汚して  
いると、一念発起した女性達の代表であ

## 源流のまちを意識して、 毎日の生活を変えてみる



30周年記念事業の中で作った、  
国道39号線沿いにあるメッセ  
ージ・ボード

# 川に生きる

上川町が誇る商工会婦人部の女性達の勇姿（「石狩川に魚と虫を帰そうかい」出発式）



い水を流せば下流の水が汚れる。そうい  
う事を地元の人々が認識して、毎日の生  
活で小さなことでもいいから始めていく。  
その発想が30周年記念事業の始まりなん  
です。ですからこの事業にこれほど反響が  
あるとは思っていませんでしたが、大規  
模な「石狩川に魚と虫を帰そうかい」につ  
ながった。でもこれで終わりではなく、  
これを出発点として今後の活動につなげ  
ていく事が重要だと思います。  
自己責任の重要性が問われている今、  
一人一人の意識が周りを変えていきます。

## 家庭の問題だから、 家庭に持ち帰って考えてほしい

外で得たものを家庭生活に活かす。渡  
部さんは簡単なようでいてとても難しい  
ことを、オリジナルな工夫も加えて周辺  
に広げていきます。  
「現在、商工会婦人部は90名弱で活動  
しています。昔はもっと多かったですよ。  
町内中心部の奥様達はほとんどがナ  
スキージャンプのメダリストで上川町出  
身の原田雅彦選手のお母様も入っている

## 女性の感性を活かした、 通る人が立ち寄ってくれる まちを目指して……

「現代のようなストレスの時代には、  
水の持つ力が必要なのではないでしょ  
うか。水は触っているだけで心がやすら  
げよう、癒しの効果がありますよ。子  
供達なんて、時間を忘れて水と遊んで  
ほしい。まあ、ここには清流が流れて  
いますけど、私は本当にここに子供達が  
気軽に遊べるような水辺の施設があれば  
いいなと思います。それから今回の一連  
のイベントで気になったのですが、石狩  
川がもっと見えるというか、位置がわか  
るようにならないかな、ということですよ。  
上川町は道路沿いに流れているのですが、  
他の町では探すのが大変でした。川がど  
こにあるのかわからない状況じゃ、気軽  
に川に親しむことはできないんじゃない  
かしら。川が孤立しては川に対する意識  
も育たないと思うので、川がその町のシ  
ンボルとなるような工夫も必要ですね。  
上川町では今、中心市街地の再開発事  
業が進んでいます。そこに女性の感性  
が活かされたまちづくりができればと思  
います。駅前には夏は噴水、そして冬には  
子供達が雪遊びができるようなものがあ  
れば……。ここは国道が通った観光の  
起点でもあります。通る人が寄ってみた  
いなと思うような、温もりあるまちづく  
りを目指したいですね」。

渡部さんは、中央町で「メープル」と  
いう喫茶店を営んでいます。そこは女性  
達の情報交換、憩いの場となっていて、  
店前には溢れんばかりの花々が飾られて  
いました。前向きで明るい女性達が住む  
この町は、とても輝いて見えました。



# 流域の現在

母なる石狩川が流れる大地は豊かで、様々な恵みをもたらしてくれます。その豊かさを最大限に活かし、住民や観光客に提供する独自のまちづくりがあります。

## T o w n s   t h e   P r e s e n t

私は木を大切に育て、緑を大切にすること、地域のコミュニティの基本ではないかと思っています。札幌という大都市の近郊にあって、大

**緑を大切に育てる心と育つ郷土の故郷を目指す**

「新篠津村の緑化推進活動は、ふるさと並木造成基金を活用して植樹や補植事業、明るい村づくり運動推進協議会が「グリーン&クリン運動」を実施するなど、息の長い活動を続けてきました。最近では中学生による一人一本植樹活動や石狩川築堤の桜とつじの植樹、それから村民の手による篠津運河沿いへのドイツウヒの植樹などで、今後も住民と一体となって活動していきたいと思っています。」

市の人達が故郷を求めようという、そういった環境整備をしていきたい。今レジャー志向は「安・近・短」といわれ、本村も36万人の入り込みがあります。緑がある、きれいな空気があって、そして人情がある場所、それが新篠津村の務めかなと・・・

これからは老後に住む所を選ぶ時代になってきます。「ヒューマン・カントリ」を目指して、人情味溢れる偉大な田舎を作ろうと今色々やっていますよ。宿泊施設を完備した「しんしの温泉たつぷの湯」やふれあい農園にも力を入れています。1区画45坪、年間9,000円で利用でき、隣には無料パークゴルフ場。新篠津村に来たら、土に触れてパークゴルフをして、そして温泉に入って野菜を買って帰る。そういうレジャーを提供しています。」

## 田園という心象風景を鮮やかに写す心の故郷。住民一体の緑づくりで内閣総理大臣表彰

**長年の緑化活動が評価され、緑化推進運動功労の表彰に輝く**

田園がぐるり360度広がり、郷愁を誘ういつまでも眺めたい風景。そんな新篠津村の牧歌的美しさを支えているのは住民と行政が一体となった緑化活動で、長年の活動が評価され、本年度の緑化推進運動功労の内閣総理大臣表彰を、8月24日、首相官邸で受けました。今回は住民を代表して、小淵内閣総理大臣より表彰を受けた加賀谷強新篠津村長に、緑化活動や新篠津村のまちづくりについてお話を伺いました。



## 新篠津村

石狩郡新篠津村第47線北13番地  
tel.(0126)57-2111

## 滝川市

滝川ふれ愛の里  
滝川市西滝川76番地1  
滝川都市農村交流施設管理組合  
tel.(0125)26-2020



美味しさと出会う、優しさと出会う。手作りのぬくもり溢れる、滝川ふれ愛の里

**特産品や手作り工房、まちの思想まで、滝川まるごと体験施設**

悠々と流れる石狩川を見下ろし、大空を駆けるグライダー。今やすっかりスカイスポーツの街として全国的に名を馳せた中空知の中核都市滝川市は、土づくりを基本とした安全でおいしい農作物の産地としても有名です。そんな滝川の美味しいものをお腹一杯味わい、健やかなひとときが過ごせる「滝川ふれ愛の里」は、オープンから2周年を迎え、住民のそして観光客の新たな憩いの場として定着しています。

**住民が協力した、メイド・イン・滝川のこだわり**

人気の秘密は地元産100%の新鮮素材を徹底的に活かしたこだわりのアイデアと、そば打ちやパン作り体験、オリジナル薬膳料理、地ビールなどを通して感じる手作りのぬくもりです。施設は市内の農家で作る「滝川都市農村交流施設管理組合」が管理・運営し、体験施設や薬膳メニューなど各施設でも住民が協力して手作りの楽しさや、健康食を提供しています。また、農産物直売所では作られた人の顔写真とメッセージが添えられています。既製品ではない手作りを人が人へ伝えていく、そこに生まれるほのぼのとした温かさ。それが口コミで広がり、そば打ちには20代のカップルなど予想以上に若い人も参加し、全体では住民のリーダーも多く、老若男女問わず幅広い層が訪れています。

ありそうでなかった、本物を体験し真のやすらぎを知ることのできる農村と都市の交流施設。豆腐作りでは残った卵の花でクッキーを作るそう。懐かしさが香る味も魅力の一つです。





## 魚が上る豊かな川を目指して…

### 1 事業の目的と実施計画の策定

「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」は、地域のシンボルとなっている河川・溪流について、堰・床止・ダム等の河川を横断する河川管理施設及び許可工物、並びに砂防ダム等とその周辺の改良、魚道の設置、改善、魚道流量の確保等を計画的、試行的に行い、豊かな水環境の創出を推進することを目的に、平成3年11月7日、建設省河川局より施行されました。

石狩川は、平成6年度「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル河川」の指定を受け、学識者を含めた検討委員会を開催し、平成10年度本事業の実施計画を策定し、このたび建設省の認定を受けました。

### 2 実施計画の概要

対象河川  
本計画は、石狩川河口から源流、支川の幾春別川、豊平川及び豊平川



石狩川魚がのぼりやすい川づくりモデル河川指定位置図  
凡例  
整備計画（遡上可能範囲）  
現況  
第1段階  
第2段階  
将来計画

河川名	延長	河川横断施設数	代表魚種
1.石狩川	268km	16	ワカサギ、ヨシノボリ類、カワヤツメ、ウグイ類、サケ、オシロココマ、エソイワナ、サクラマス、フクドジョウ
2.幾春別川	59km	5	ウグイ類、サケ、サクラマス、フクドジョウ
3.豊平川	73km	13	イトヨ、ウキゴリ、カワヤツメ、ウグイ類、サケ、サクラマス、フクドジョウ
4.真駒内川	20.8km	35	ハナカジカ、ウグイ類、サケ、サクラマス
5.厚別川	41.7km	27	イトヨ、ウキゴリ、カワヤツメ、ハナカジカ、ウグイ類、サケ、サクラマス
計	462.5km	96	

支川の真駒内川、厚別川のそれぞれ源流までの96の河川横断施設を対象に、魚の遡上環境の現状評価と改善の必要性のある施設の改善方針を検討し、事業実施に向けた基本的事項について取りまとめたものです。

### 旭川までサケが上ります—石狩川魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業実施計画

#### 整備計画

施設改善の優先順位の決定に際しては、第1段階、第2段階の整備の段階区分を設定、各河川毎の代表魚種の生育範囲を拡張する事を目的に整備計画を策定しました。

整備段階	施設改善の段階整備計画		整備目標
	目標年次	改善施設数	
第1段階	平成14年	25	「現況の問題施設を早期改善し、サケ・マス等の回遊魚を中心とした魚種の生育範囲を拡張する」を目標に、概ね5カ年（H10～H14）以内を目途に事業実施する
第2段階	平成19年	67	「全代表魚種に対して遡上環境を改善すること」を目標に第1段階整備後の改善効果を見て、その後概ね5カ年（H15～H19）以内に事業化する
将来計画	将来	3	今後の検討課題施設（ハイダム）については、「将来計画」として位置付ける

## 川遊びができるきれいな川へ

### 『流水保全水路』試験放流後の調査結果公表

間の改善効果と新しい放流口下流の影響を1年間調査しました。今回その中から、問題となっていた



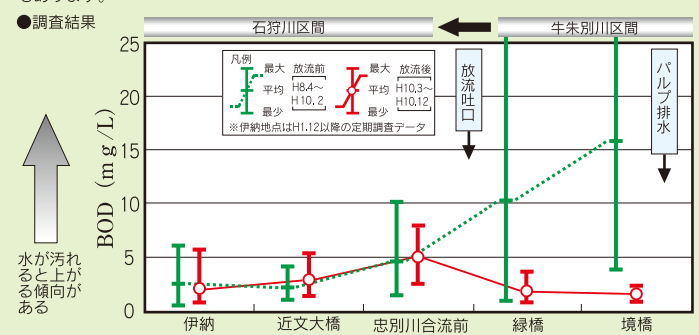
流量の大きい石狩川で放流し、希釈効果を高めた（完成した流水保全水路放流口）

旭川市市街地中心部の牛朱別川と石狩川合流地点は、「川のまち・旭川」のシンボル、旭橋や100周年記念河川公園があり、夏や冬の大きなイベント会場にもなっている市民の憩いの場です。しかし、牛朱別川には都市排水や工業排水が流れ込み、濁ったり、悪臭が発生し、河川環境が悪化していました。このため埋設したパイパス導水路を使って、都市排水を水量の少ない牛朱別川から水量が多く排水が希釈される石狩川に流す、「流水保全水路整備事業」を昭和63年から北海道で初めて着手、昨年の2月から試験的に放流を開始し、放流後の水路によるパイパス区



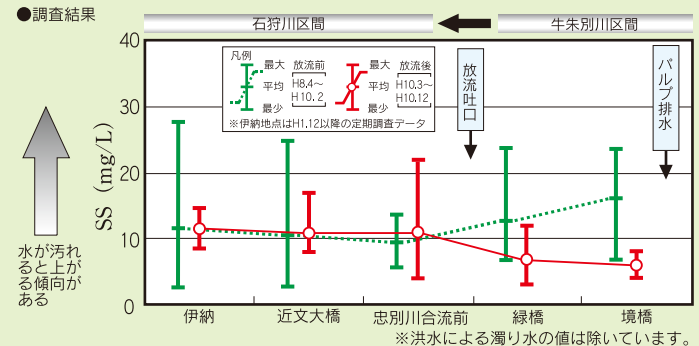
#### 【水質項目(BOD)】

川の水の汚れの程度を表す指標の一つ。自然界では微生物が汚れを分解するので、微生物によって分解される有機物の量の目安になります。値が大きいくほど汚れているといえ、人間の汚染のない川で1mg/L以下、水道水源にする場合は3mg/L以下、10mg/Lを超えると悪臭が発生することもあります。



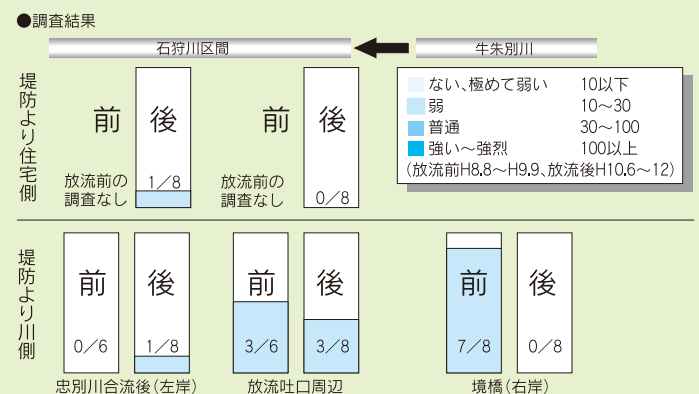
#### 【水質項目(SS)】

水の濁りの程度を表す指標の一つで、「水に溶けない（懸濁）物質による濁り」です。溶けない物質とは、粘土のような土の成分、プランクトンやその死骸など。値が大きいくほど汚れているといえ、通常の河川で25～100以下、雨の後では数100になることもあります。



#### 【臭気】

その種類と強さ（臭気強度）に分けることができます。土臭、草臭、排気ガス臭などで、臭いの強さ（臭気強度）は、10とか200という値で表され、値が大きいくほど、臭いが強いことを表します。目安として臭気強度10以下でやっとわかる程度、10～30で何の臭いかわかる程度、300前後で急に感知、5,000を超えると強い臭い、1万以上で強烈な臭いです。



※棒グラフは全調査回中（右数字）でその臭気強度があった、回（左数字）割合を表しています。例えば「1/8」とは、8回調査をして1回強い以上の臭いを確認したことを表します。

た濁りと臭いについての結果を報告します。牛朱別川や石狩川の都市区間（都市排水パイパス区間）は、水質や臭いが改善され、生き物にとって住みやすい川に変わったという結果が得られました。

この結果を踏まえ「川のまち・旭川」にふさわしい川づくりが、まちづくりに大きく貢献できるものと考えます。

#### 事業実施

改善対象施設の事業の執行は、財産管理者（国、北海道、北海道電力）もしくは施設管理者が行う事が基本ですが、事業の趣旨に鑑み、関係機関と調整した上で早期実現を目指します。現在、第1段階改善施設に位置付けられている石狩川花園頭首工の魚道設置（H12完予定、国施工）、厚別川第15号、16号、17号落差工の魚道設置（H11完予定、北海道施工）等、実施計画に基づき整備を進めています。平成14年までに、石狩川本川では旭川市街までサケ・マスが上れるようになります。



施工前

施工後

「河道を安定させるための落差工が、魚類遡上の障害となっていました」

「河道安定機能を維持しながら、魚類に配慮した構造にしています」

厚別川 13号落差工（道施工）



**自分達の手できれいにして、  
思いっきり川と遊ぶ。**

楽しくて意義あるイベントが、道東の自然に恵まれた春別川で行われています。川遊びを通じ、川を大切にすることを狙っています。



ゴミ拾いの後はお待ちかねのいかだ下り

**毎年恒例、春別川の「グリーンいかだ下り」**

春別川は別海町の中春別市街を流れる、緑豊かな2級河川です。この春別川では、昭和61年から毎年、環境美化などを目的に、清掃活動も併せて実施するイベント「グリーンいかだ下り」が、住民らでつくる「別海町自然に親しむ会」主催により行われています。13回目の開催となった今年は、8月8日の日曜日に行われ、近隣の小学生を含めた約100人の



**住民交流と生物の環境保全を  
果たした河川愛護活動。**

水環境保全に功績のあった個人、団体に贈る「水環境賞」。今年は全国から20人と29団体が受賞、道内からは唯一新琴似西連合町内会が受賞しました。



住民による川沿いの清掃活動

**安春川の河川整備**

札幌市の北区新琴似地区を流れる安春川は、屯田兵によって、当時湿原であったこの地域の水害防止と農地利用を目的に開削された水路を起源としています。開拓後一世紀余りの都市化の波の中で、流域の大部分は市街化されてきました。このため、昭和47年度から札幌市が河川改修を進め、平成4年度に整備が完了しました。

**住民の河川愛護活動**

新琴似西連合町内会は、北区新琴似地区西側の17町内会により組織されている住民の自治組織です。安春川はこの連合町内会の中央を流れ、地域の顔として親しまれてきました。住民にもっと身近に感じてもらう、また、より美しく保っていくために、当連合町内会では昭和61年から毎年、河川環境の美化活動を行っています。当連合町内会の大西義弘会長によると、「皆が安春川に親しみを持っている現れ。この活動が動物の生息環境の保全につながり、住民同士の交流も活発になった。今後「も続けたい」とのことです。毎年、お年寄りから子供まで1000人前後が集まり、川沿いのゴミ拾い、草刈り、花壇の整備を年間3回ほど行っている他、「川を汚さない運動」として川の清掃や町内会行事期に、拡声器を使って川周辺を車で巡回して呼びかけたり、「川はみんなのもの、川をきれいに」という立て看板の設置等を行っています。

安春川では、こうした地域の河川愛護活動に支えられ、きれいな水環境が維持・保全されています。近年では、春と秋にカモが飛来、魚の姿もみられ、子供達が餌をあげたり、夏には釣り糸を垂れる光景も目にするようになりました。

浅沼札幌市建設局長から「水環境賞」を伝達される大西義弘新琴似西連合町内会長



**安春川の河川愛護活動で、新琴似西連合町内会が「水環境賞」受賞**

人の参加者が川沿いを歩いてゴミ拾いをした後、子供達や職場単位で参加した思い思いの手作りのいかだ約20隻が春別川の川下りを楽しみました。中には転覆したり浅瀬に乗り上げた場面も見られましたが、橋や川岸からの声援を受けながら約



子供達に配布した下敷き

今回、この川の管理者である釧路土木現業所は「確かな川づくり推進事業」により、広報用のチラシやTシャツ、さらに小学生などを対象に、春別川の水辺にいる動植物や「グリーンいかだ下り」を紹介した下敷きを作成・配布し、このイベントを側面から支援しました。

「確かな川づくり推進事業」は北海道の川づくりのあり方を示した「北海道の川づくり基本計画」に沿った生きた川づくりを達成するための方策の一環として、小学生を対象に川づくりの体験学習や学習教材の提供により、川に対する理解や関心を高めるための事業で、平成8年から全道各地で行っています。

**地域とともに水辺環境の保全を**

札幌市内での「水環境賞」の受賞は、昨年度、北区あいの里の拓北川（トンネウス沼）などを中心にしてトンボの調査研究活動を続けている北海道札幌拓北高等学校理科研究部（顧問・綿路昌史先生）に続くものです。近年、各地で河川愛護活動などのコミュニティ活動や環境教育活動が活発化し、良好な水辺環境を将来の世代へ引き継いでいくうえで、「行政と地域のパートナーシップが益々大切になっている（札幌市河川課）」といえます。



飛来したカモの群れ



いっばい詰まった1日  
フクフクがキ、  
ゴキ、

# 平成11年度 親子水体験 バスツアー

川に触れ、川を学び、川と遊ぶことを目的とした親水体験親子バスツアーが、砂川市内在住の小学校3〜6年生と保護者約60名が参加して、8月22日(日)に行われました。今回のコースは、午前中に芦別滝里ダム、雨竜川捷水路を見学し、砂川オアシスパークで昼食、午後は滝川川の科学館を見学後、カヌーとボート体験を北光公園にて行いました。心配そうなお母さん達を後目に、子供達は水辺の気持ちよさを満喫し、小さな冒険は無事終了しました。川と触れ合った素直な感想文とその表情を捉えた写真を、一部ですが紹介します。



The Message from ISHIKARIGAWA SINKOUZAIDAN

## 石狩川振興財団・活動報告

1900年代最後の夏、様々な催しを通して石狩川にはたくさんの人々が集いました。新しい時代は今より一歩進んだ川と人との関係が築けるよう、これからも提案、活動し続けたいと思います。

住民参加と地域の  
連携がまち・  
国を変えていく！  
市町村河川情報委員  
情報交換会議

この交換会は石狩川流域48市町村の方々を対象に、(財)石狩川振興財団設立の目的である「健全な河川流域の発展」のため、河川とその周辺地域との結びつきを深めることを目的として、平成6年度より毎年2回開催し、今年度は5月19日(水)に行われました。

まず「河川整備と住民参加」というテーマで石狩川開発建設部計画担当の鈴木英一次長が、河川にまつわる様々な問題はもはや、行政の枠組みで解決することは困難であり、流域の健全な水循環の構築、総合的な土砂管理、川に学ぶ社会、河川の多様な機能を生かした都市の再構築、大洪水の被害を食い止めるための危機管理対策という5つの課題と、その取り組みを一つ一つ具体的に説明されました。

そして地域交流センターの代表であり、日本エコライフセンター代表幹事、全国水環境交流会のコーディネーターも兼務し数多くの要職を持つ田中米治氏が「流域圏の創造」と題した講演を行いました。

田中氏から出席者への問題提起から始まった講演は、上流と下流が支え合っていくことの重要性。そして目標を決めて何年かかっても積み上げていく成長の概念、たくさんの方々の議論の必要性、流域の連携こそがまち、そして国土の施策になっていくという考えに出席者一同共鳴し、質疑応答でも活発な意見が交わされた。

知識と経験豊富なアイデアマンでもある両氏の現実にかつ創造性溢れる提案が次々に出され、出席者にはまち

### 編集後記

◎1900年代最後の「川と人」の刊行となりました。

時宜にかなうって、「第9回水環境全国交流シンポジウム」が北海道札幌市で開催されましたので、特集として取り上げました。この開催にあたりましては、昨年12月に制定されたNPO法に基づき、本年4月に認証されたNPO法人「水環境北海道」との密接な連携の基で、多様な催事を実行しました。連携のあり方を問う上から大変意義があったと思っております。

◎また、石狩川の源流の町「上川町」の商工会・婦人部の発想で、石狩川の水質保全という観点から、源流の町から河口の町まで延長260kmを、1週間かけてカヌーで下る壮大な川下りリレーが初めて敢行されましたので、イベントリポートとして取り上げました。

◎21世紀の流域の持続可能な発展にあたっては、多様な主体による責任ある参加と行政単位の枠を超えて、地域間の連携が基本となるかと思っています。このような意味から、多様な主体の連携をきっかけとして、大変意義深いものがあつたと思っております。

なお当財団としまして、21世紀の流域管理の方向性として、国、地方公共団体等の行政と地域住民ボランティア団体等の有機的な連携を図る上から、所内の一角にNPO法人「水環境北海道」の札幌事務局を開設いたしております。

最後に編集にあたり、何かと多忙の中、寄稿、インタビューに応じていただいた方々に感謝申し上げます。1900年代最後の編集後記といたします。



川に住む生き物達に興味津々



最初は恐がっていたけれど、すぐにこの笑顔



皆が一番楽しみにしていた北光公園でのカヌー

### 受賞者一覧

#### 作文の部

大賞	豊沼小5年生	大久保 翔
優秀賞	砂川小3年生	東 志津伽
優秀賞	中央小5年生	大柄 そよか
優秀賞	空知太小6年生	山梨 学

#### 写真の部

大賞	砂川市	堀 靖孝 (父)
優秀賞	砂川市	佐藤 倫代 (母)
優秀賞	砂川市	久保 正之 (父)
優秀賞	三上市	ひとみ (母)

#### 作文の部 大賞

豊沼小学校 5年生 大久保 翔

「親水体験親子バスツアー」に参加して

8月22日に僕とお父さんと、「親水体験親子バスツアー」に参加しました。見学場所は、滝里ダム、雨竜川しよう水路、川の科学館、カヌー体験で、1日コースです。

滝里ダムは、とても大きくてダムの管理をコンピュータでしていたのは、おどろきました。来年には、公園ができると思うので遊びに行きたいと思っています。

#### 雨竜川しよう水路は、洪水になって農家の人々の被害を最小限にするために、川のコースを変えたものです。人間の力で川のコースを変える事は、どうやっているのかきょうみをもちました。

川の科学館とカヌー体験は、何度か行ったことがあるけど、今回のツアーで僕が一番楽しみにしていた所でした。カヌー体験では、とちゅうで雨がふってきて、時間がすくなくなつて残念でした。

今回の「親水体験親子バスツアー」に参加して感じたことは、川は多くの人達が管理して守っているんだなあと思いました。



写真の部 大賞 砂川市 堀 靖孝 (父)